

注意事項

1. 試験問題の数は60問で解答時間は正味2時間30分である。
2. 試験問題の持帰りを認めない。
3. 解答方法は次のとおりである。
 - (1) 各問題にはaからeまでの五つの答えがあるので、そのうち質問に適した答えを一つ選び、次の例にならって答案用紙に記入すること。

(例) 101 県庁所在地はどれか。

- a 栃木市
- b 川崎市
- c 神戸市
- d 倉敷市
- e 別府市

正解は「c」であるから答案用紙の

101 a b c d e のうち c をマークして

101 a b c d e とすればよい。

- (2) 答案の作成にはHBの鉛筆を使用し、濃くマークすること。
良い解答の例…… (濃くマークすること。)
悪い解答の例…… (解答したことにならない。)
- (3) 答えを修正した場合は、必ず「消しゴム」であとが残らないように完全に消すこと。鉛筆の色が残ったり「」のような消し方などをした場合は、修正したことにならないので注意すること。
- (4) 1問に二つ以上解答した場合は誤りとする。
- (5) 答案用紙は折り曲げたりメモやチェック等で汚したりしないよう特に注意すること。

1 22歳の初妊婦。妊娠33週。自宅で水様の帯下を突然認めたため来院した。昨日夕方から軽度の腹部緊満を認め安静にしていた。現在、帯下の流出感はない。

腔内容物の検査で診断に有用なのはどれか。

- (1) プロスタグランジン
- (2) α -フェトプロテイン
- (3) 羊歯状結晶
- (4) カンジダ
- (5) Döderlein 桿菌

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

2 33歳の初妊婦。妊娠39週に陣痛が発来したので来院した。子宮口3cm開大、展退度90%、児頭は骨盤入口部に固定、SP -1cmで矢状縫合は骨盤横径に一致し未破水である。子宮収縮は3分間隔、持続は1分。胎児心拍数陣痛図は正常であった。経過を観察していたところ5時間後に自然破水し子宮口は全開となった。さらに2時間後の診察所見では、児頭はSP \pm 0cm、矢状縫合は骨盤横径に一致している。この時点での胎児心拍数陣痛図(別冊No. 1)を別に示す。

次に行うべき対応はどれか。

- a 経過観察
- b オキシトシン点滴
- c 吸引遂娩術
- d 鉗子遂娩術
- e 帝王切開術

別冊
No. 1 図

3 25歳の1回産婦。妊娠29週。定期的妊婦健康診査のため来院した。前回の妊娠・分娩経過ともに正常で、児にも異常はみられなかった。既往歴と家族歴とに特記すべきことはない。前回までの妊婦健康診査で異常は指摘されていない。今回の超音波検査で、胎児に腹水、胸水および皮下浮腫が認められる。

母体血液検査で原因検索に有用なのはどれか。

- (1) 赤血球
- (2) 血小板
- (3) 不規則抗体
- (4) ヘモグロビンF
- (5) CRP

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

4 4か月の女児。元気がないということで来院した。在胎38週、体重1,840gで出生し、仮死はなかった。生直後から、かん高い子猫のような泣き声である。身長52cm、体重3,720g、頭囲32cm、胸囲33cm。丸顔で両眼距離が広く、臉裂は外側で下方を向き、耳介は低位で、顎が小さい。筋緊張が低下し、弱々しい感じがする。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 母系遺伝である。
- b 5番染色体の異常による。
- c 知能は正常である。
- d 心奇形を伴う。
- e 主な死因は声門浮腫である。

5 52歳の男性。全身倦怠感と気分の不快とを主訴に妻に伴われて来院した。部長に昇進して間もなく、疲労感が強く、夜眠れず、食欲も低下した。仕事に集中できず、続けてやっていける自信がない。責任の重さが負担となり、将来を悲観している。特に朝は気分がすぐれず、夜は気持ちが比較的楽になる。強い自責の念が認められる。

正しいのはどれか。

- a 幻覚の有無が診断上重要である。
- b 脳の画像診断を直ちに行う必要がある。
- c 抗不安薬が第一選択である。
- d 自殺の危険に対して配慮する。
- e 「がんばれば元気になる。」と励ます。

6 7歳の男児。落ち着きがないことを主訴に母親に連れられて来院した。5歳ころから一つのことを続けてやれない。じっとして授業を受けていられず、教室を走り回ったりするため、担任の教師から受診を勧められた。診察中、たえず手足をそわそわと動かしているのが認められる。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 遺伝性疾患である。
- b てんかんを伴いやすい。
- c 衝動性が強い。
- d 人格障害である。
- e 薬物療法は無効である。

7 25歳の男性。皮疹を主訴に来院した。1週間前から咽頭痛と37℃台の発熱とがあり、市販の感冒薬を内服していた。2日前から全身に灼熱感があり、皮膚をこするとズルリとむける。血液所見：赤沈40 mm/1時間、赤血球410万、Hb 13.5 g/dl、白血球9,500。皮膚病変の写真(別冊No. 2)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a TEN(中毒性表皮壊死症)
- b 水疱性類天疱瘡
- c 後天性表皮水疱症
- d うっ滞性皮膚炎
- e 伝染性膿痂疹

別冊
No. 2 写真

8 9歳の男児。皮疹を主訴に来院した。乳児期から日光にあたると紅斑が持続し、5歳ころから皮膚の乾燥、萎縮および色素沈着が目立つようになった。血液所見：赤血球420万、Hb 13.0 g/dl、白血球6,300。顔面の写真(別冊No. 3)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 常染色体優性遺伝である。
- b Köbner 現象がみられる。
- c 皮膚悪性腫瘍を高率に合併する。
- d 下痢を伴う。
- e PUVA 療法を行う。

別冊
No. 3 写真

9 60歳の女性。3年前から徐々に視力が低下したため来院した。視力は右0.6(矯正不能)、左0.5(矯正不能)。両眼ともに眼底に異常はみられない。前眼部の写真(別冊No. 4)を別に示す。

異常がみられるのはどれか。

- a 角膜
- b 前房
- c 瞳孔
- d 水晶体
- e 硝子体

別冊
No. 4 写真

10 70歳の男性。羞明と視力障害とを主訴に来院した。視力は右0.4(矯正不能)、左0.5(矯正不能)。眼底には異常がなく手術適応と診断された。この手術に必要な医療用具(別冊No. 5)を別に示す。

この医療用具の挿入部位はどれか。

- a 角膜
- b 虹彩
- c 水晶体
- d 硝子体
- e 網膜

別冊
No. 5 写真

11 68歳の女性。両側の難聴を主訴に来院した。3か月前に感冒様症状の後、40℃の発熱と髄膜刺激症状とが数日間続き、解熱とともに両側の難聴が出現した。近医で治療を受けたが改善しないため紹介された。身体所見に異常はない。発語の障害はないが、難聴のため会話はできず、筆談のみ可能である。鼓膜所見に異常はない。インピーダンスオージオグラムは正常である。純音聴力像(別冊No. 6)を別に示す。

適切なのはどれか。

- a 補聴器の装着
- b 鼓室形成術
- c 内耳窓閉鎖術
- d アブミ骨手術
- e 人工内耳植え込み術

別冊
No. 6 図

12 45歳の女性。右顎下部の腫脹を主訴に来院した。半年前から食事摂取の際に右顎下部の腫脹と軽い痛みとが出現し、数時間で消失する。食事摂取時以外はあまり症状がない。2週前から右顎下部の腫脹が消退しない。頸部リンパ節の腫脹は認めないが、右側の口腔底に硬結を触知する。血液所見：赤血球412万、Hb12.3g/dl、白血球8,600。免疫学所見：CRP1.8mg/dl(基準0.3以下)、抗核抗体(-)、抗SS-A抗体(-)、抗SS-B抗体(-)。口腔底単純CT(別冊No. 7)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 唾石症
- b Sjögren 症候群
- c 顎下腺良性腫瘍
- d 顎下腺癌
- e リンパ管腫

別冊
No. 7 写真

13 65歳の男性。腹部外傷のため、全身麻酔下に開腹脾摘術を受け、気管内挿管のままICUに収容された。生来健康で、喫煙歴は30歳から1日20本程度であった。術前の胸部エックス線写真と心電図とに異常はなかった。ICU入室時、人工呼吸下の血行動態は安定し、呼吸音に異常はなく、動脈血ガス分析(調節呼吸、 FiO_2 0.4)はpH 7.41、 PaO_2 135 Torr、 $PaCO_2$ 35 Torr、BE -1 mEq/lであった。入室の翌朝、左肺の呼吸音が消失し、動脈血ガス分析(間欠的強制換気(IMV)、 FiO_2 0.4)はpH 7.35、 PaO_2 68 Torr、 $PaCO_2$ 42 Torr、BE -3 mEq/lであった。血行動態に変化はみられない。このときの胸部エックス線写真(別冊No. 8)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- (1) 喀痰培養
- (2) 血栓溶解療法
- (3) 胸腔ドレナージ
- (4) 呼気終末陽圧(PEEP)適用
- (5) 気管支ファイバースコープによる喀痰吸引

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 8 写真

14 72歳の男性。発熱、咳および呼吸困難を主訴に来院し、当日入院した。来院12日前に温泉に行き、来院3日前から38℃台の発熱があり、呼吸困難、咳、淡い血痰および全身倦怠感を認めた。生来健康で、喫煙歴は20歳から1日20本。意識は清明。脈拍104/分、整。血圧110/70 mmHg。血液所見：赤血球410万、Hb 14.5 g/dl、Ht 43%、白血球14,200。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.43、 PaO_2 56 Torr、 $PaCO_2$ 33 Torr。入院後、セフェム系抗菌薬による治療を開始したが症状が改善せず、精神症状も認められるようになった。このため入院4日目に人工呼吸器を装着し、エリスロマイシンの投与を始めた。入院7日目には肺野陰影の著明な改善を認めた。入院時の胸部エックス線写真(別冊No. 9A)と入院4日目のポータブル胸部エックス線写真(別冊No. 9B)とを別に示す。

考えられる疾患はどれか。

- a 肺炎球菌肺炎
- b レジオネラ肺炎
- c 肺アスペルギルス症
- d サイトメガロウイルス肺炎
- e ニューモシスチス・カリニ肺炎

別冊
No. 9 写真A、B

15 42歳の女性。呼吸困難を主訴に来院した。2日前から発熱と咽頭痛とを認め、さらに喘鳴と呼吸困難とが出現するようになった。10年前から慢性副鼻腔炎と鼻茸との加療を受けている。5年前から感冒時に同様の呼吸器症状が生じるようになり、2年前には感冒薬を服用し、呼吸困難が増強して、1週間ほど入院治療したことがある。意識は清明でチアノーゼは認めない。体温 38.5℃。脈拍 108/分、整。血圧 156/90 mmHg。全肺野に呼気時の wheezes (笛様音) を聴取する。

発作を増強する可能性の高いのはどれか。

- a 抗菌薬
- b 解熱鎮痛薬
- c 抗コリン薬
- d 抗ヒスタミン薬
- e カルシウム拮抗薬

16 43歳の女性。左乳頭からの血性分泌を主訴に来院した。左乳房に腫瘤は触知しない。圧乳房エックス線単純写真で腫瘤像と微細石灰化像とを認めない。

最も考えられるのはどれか。

- a 乳腺症
- b 乳腺線維腺腫
- c 乳腺管内性乳頭腫
- d 乳腺葉状腫瘍
- e 乳癌

17 33歳の男性。脈の不整に気づき来院した。小学校時からサッカー選手として活躍し、現在も続けている。既往歴に特記すべきことはなく、自覚症状もない。来院時に記録した心電図(別冊No. 10)を別に示す。

この患者で適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b 抗凝固療法
- c β 受容体遮断薬投与
- d 電氣的除細動
- e 心臓ペースメーカー

別冊
No. 10 図

18 4か月の乳児。多呼吸を主訴に来院した。出生後に Down 症候群と診断されている。前胸部に収縮期雑音を聴取する。胸部エックス線写真で肺うっ血を呈し、心胸郭比 68% である。心電図(別冊No. 11A)と心エコー図(別冊No. 11B)とを別に示す。

診断はどれか。

- a 心房中隔欠損症
- b 心室中隔欠損症
- c 完全型心内膜床欠損症
- d Fallot 四徴症
- e 完全大血管転位症

別冊
No. 11 図A、写真B

19 64歳の女性。労作時の息切れを訴え来院した。生来健康であったが、3か月前から脈の不整を自覚し、家の階段を昇る程度の労作で息切れをするようになった。脈拍88/分、不整。血圧102/76 mmHg。胸部でラ音は聴取しない。心尖部から記録した収縮後期の心エコー図(別冊No. 12A)とカラードップラー心エコー図(別冊No. 12B)とを別に示す。

この患者でみられる所見はどれか。

- a I音亢進
- b 収縮中期クリック
- c 僧帽弁開放音
- d 拡張中期雑音
- e 駆出性収縮期雑音

別冊
No. 12 写真A、B

20 70歳の男性。持続する前胸部痛を主訴に来院した。同症状は昨夜から出現し、冷汗を伴うようになった。体温37.0℃。呼吸数22/分。脈拍96/分、整。血圧80/56 mmHg。肺野に coarse crackles(水泡音)を聴取する。緊急で行った左冠動脈造影写真(別冊No. 13A)と拡張期と収縮期との左室造影写真(別冊No. 13B)とを別に示す。

適切な治療法はどれか。

- (1) 経皮的冠動脈形成術
 - (2) 大動脈内バルーンパンピング(IABP)
 - (3) 冠動脈バイパス術
 - (4) 左室瘤切除術
 - (5) 心室中隔穿孔閉鎖術
- a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 13 写真A、B

21 53歳の男性。易疲労感、腹部膨満感および下肢の浮腫を主訴に来院した。頸静脈の怒張を認める。右肋骨弓下に肝を4 cm 触知し、肝の圧迫により頸静脈の怒張が顕著となる。胸部エックス線写真側面像(別冊No. 14A)と心臓カテーテル検査での右室圧曲線(別冊No. 14B)とを別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 病因としてウイルス性が多い。
- b II音の固定性分裂を聴取する。
- c 前胸部で心膜ノック音を聴取する。
- d 心エコー検査で左室収縮不全を認める。
- e 右室拡張期圧は正常である。

別冊
No. 14 写真A、図B

22 25歳の女性。頭痛を訴えて来院した。身長151cm、体重48kg。脈拍80/分、整。血圧220/130mmHg、左右差はない。心雑音や肺のラ音は聴取しない。血管雑音を頸部には聴取しないが、心窩部に聴取する。下腿に浮腫はない。尿所見：蛋白1+、糖(-)、潜血(-)。血清生化学所見：尿素窒素20mg/dl、クレアチニン1.2mg/dl、Na145mEq/l、K3.5mEq/l、Cl102mEq/l、アルドステロン24ng/dl(基準5~10)、血漿レニン活性6.0ng/ml/時間(基準1.2~2.5)。腹部大動脈造影写真(別冊No. 15A)と選択的右腎動脈造影写真(別冊No. 15B)とを別に示す。

正しい診断はどれか。

- a 大動脈炎症候群
- b 動脈硬化症
- c 線維筋性異形成
- d 結節性多発動脈炎
- e 腎動静脈瘻

別冊
No. 15 写真A、B

23 55歳の男性。嚥下障害を主訴に来院した。3か月前から食事の時につかえる感じが出現し、1か月前から固型物のつかえ感が顕性化してきた。水を大量に飲んで流しこむ状態で、この3か月で体重が5kg減少した。横臥すると数時間前に食べたものが口腔内に逆流してくる。逆流内容物は食物残渣のみで、血液の混入はなく、酸味もない。食道造影写真(別冊No. 16)を別に示す。

この患者で除外できるのはどれか。

- a 逆流性食道炎
- b 食道癌
- c 食道憩室
- d 食道アカラシア
- e 噴門部癌

別冊
No. 16 写真

24 3歳の男児。血便を主訴に来院した。腹痛はない。顔色はやや不良である。胸骨左縁第2肋間に2/6度の収縮期雑音を聴取する。腹部は平坦、軟で、圧痛はない。腸雑音は正常である。肝を右肋骨弓下に2cm触知する。血液所見：赤血球268万、Hb6.9g/dl、Ht20%、白血球6,500、血小板28万。^{99m}Tc-pertechnetateシンチグラム(別冊No. 17)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 回腸部にみられる。
- b 固有筋層を欠く。
- c 腫瘤として触知する。
- d 蛋白漏出性胃腸症を合併する。
- e 出血はビタミンK欠乏による。

別冊
No. 17 写真

25 72歳の女性。腹痛と下血とを主訴に来院した。昨日昼ころから腹痛と下痢とが出現した。下痢は止痢薬で止まったが、夕方から下血が始まった。意識は清明。体温37℃。脈拍96/分、整。血圧122/74 mmHg。臍上部に圧痛を認める。血液所見：赤血球465万、Hb 14.2 g/dl、Ht 42%、白血球11,800、血小板22万。CRP 3.9 mg/dl (基準0.3以下)。大腸内視鏡検査でS状結腸に局限する病変を認めた。病変部の写真(別冊No. 18)を別に示す。

絶食と輸液とに続いて行うべきことはどれか。

- a 経過観察
- b 解熱鎮痛薬投与
- c 抗プラスミン薬投与
- d スルファサラジン投与
- e 副腎皮質ステロイド薬投与

別冊
No. 18 写真

26 28歳の経産婦。肛門から腫瘤状のものが脱出するようになったと訴えて来院した。3年前から排便時に同様なことが時々あったが、自分で還納できたため放置していた。10日前から脱出が頻回となった。来院時の背面からの写真(別冊No. 19 A)と側面からの写真(別冊No. 19 B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 外痔核
- b 脱肛
- c 直腸脱
- d 直腸癌
- e 肛門癌

別冊
No. 19 写真A、B

27 25歳の男性。4日前から倦怠感が出現し、褐色尿と結膜の黄染とに気づき来院した。腹痛はない。最近の薬剤服用歴と海外渡航歴とはない。2か月前歓楽街で女性と性交渉をもった。血清生化学所見：総ビリルビン6.5 mg/dl、AST 1,210 単位(基準40以下)、ALT 1,328 単位(基準35以下)。

陽性を示す可能性が最も高いのはどれか。

- a IgM HA 抗体
- b HBe 抗体
- c HBs 抗体
- d IgM HBc 抗体
- e HCV 抗体

28 72歳の女性。夕食6時間後に突然上腹部痛をきたして救急車で来院した。夕食に豚肉を食べた。手術の既往はない。意識は清明。身長156 cm、体重60 kg。体温37.2℃。脈拍96/分、整。血圧148/66 mmHg。顔面は苦悶状。右季肋部に圧痛を認めるが、腹膜刺激症状はみられない。血液所見：赤血球384万、Hb 11.8 g/dl、Ht 37%、白血球11,000、血小板17万。血清生化学所見：アルブミン4.2 g/dl、総ビリルビン2.1 mg/dl、AST 80 単位(基準40以下)、ALT 120 単位(基準35以下)、アルカリホスファターゼ480 単位(基準260以下)、アミラーゼ120 単位(基準37~160)。CRP 5.4 mg/dl (基準0.3以下)。

適切な治療薬はどれか。

- (1) 抗菌薬
- (2) 抗コリン薬
- (3) H₂受容体拮抗薬
- (4) 蛋白分解酵素阻害薬
- (5) 副腎皮質ステロイド薬

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

29 76歳の男性。右鼠径部の膨隆のために来院した。右鼠径靭帯より頭側の鼠径部に4×4cmの半球状の腫瘤を認める。この腫瘤は仰臥位で腹筋を弛緩させることにより消失する。右陰囊の腫大はない。

この疾患で正しいのはどれか。

- a 肥満が誘因となる。
- b 神経症状を伴う。
- c 嵌頓しやすい。
- d 膨隆の内側で下腹壁動脈を触れる。
- e 悪性腫瘍を合併しやすい。

30 5か月の男児。突然悲鳴をあげるように激しく泣くことを繰り返し、顔面蒼白になったので来院した。3日前から風邪気味であった。本日昼ころから機嫌が悪くなり、嘔吐がみられた。体重7,960g。腹部は軽度膨隆している。右上腹部に小児手拳大の腫瘤を触れ、右下腹部は空虚である。浣腸でイチゴゼリー様血便を認める。注腸造影写真(別冊No. 20)を別に示す。

この疾患で正しいのはどれか。

- a やせた児に多い。
- b 結腸が回腸に嵌入して起こる。
- c 90%に器質的疾患を伴う。
- d Ramstedt手術を行う。
- e 注腸造影は治療手段になる。

別冊
No. 20 写真

31 35歳の男性。吐血を主訴に来院した。昨夜過度の飲酒の後、本日早朝に嘔吐した。その1時間後に再び嘔吐し、吐物に血液が混じっていた。来院時、胸痛はなく、皮下気腫と腹部筋性防御とは認めなかった。食道胃接合部の内視鏡写真(別冊No. 21)を別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 食道癌
- b 食道破裂
- c Mallory-Weiss症候群
- d 胃潰瘍
- e 胃癌

別冊
No. 21 写真

32 38歳の女性。3か月前から続く体動時の動悸と息切れとを訴えて来院した。ときどき腰痛があり、月経過多の傾向がある。眼瞼結膜は蒼白で眼球結膜に黄染を認めない。血液所見：赤血球380万、Hb7.5g/dl、Ht28%、網赤血球15%、白血球3,500、血小板31万。血清生化学所見：総蛋白7.5g/dl、アルブミン4.2g/dl、Fe8μg/dl(基準80~160)、総鉄結合能(TIBC)410μg/dl(基準290~390)、フェリチン3ng/ml(基準20~120)。

適切な対応はどれか。

- (1) 婦人科的検索
- (2) 栄養指導
- (3) 鉄剤の投与
- (4) 鎮痛薬の投与
- (5) 赤血球輸血

- a (1), (2), (3)
- b (1), (2), (5)
- c (1), (4), (5)
- d (2), (3), (4)
- e (3), (4), (5)

33 65歳の男性。3日前から続く鼻出血のために来院した。3週間前から全身倦怠感を自覚している。皮膚は蒼白で紫斑と点状出血とを認める。血液所見：赤血球210万、Hb 7.2 g/dl、Ht 22%、網赤血球1%、白血球1,900(桿状核好中球1%、分葉核好中球18%、好酸球1%、単球2%、リンパ球78%)、血小板0.8万。血清生化学所見：総蛋白8.1 g/dl、アルブミン4.2 g/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、AST 32単位(基準40以下)、ALT 26単位(基準35以下)。骨髓生検H-E染色標本(別冊No. 22)を別に示す。

まず行う治療はどれか。

- (1) ガンマグロブリン大量投与
- (2) シクロスポリン投与
- (3) 抗胸腺細胞グロブリン(ATG)投与
- (4) 多剤併用化学療法
- (5) 同種骨髄移植

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 22 写真

34 28歳の女性。歩行時の息切れと性器出血とを主訴に来院した。皮膚は蒼白で両下肢に紫斑と点状出血とを認める。血液所見：赤血球310万、Hb 9.5 g/dl、Ht 29%、網赤血球10%、白血球2,400、血小板1.3万。骨髓血塗抹May-Giemsa染色標本(別冊No. 23)を別に示す。

予想される検査所見はどれか。

- a 抗血小板抗体陽性
- b ハプトグロビン低下
- c 血清FDP増加
- d 血清カルシウム高値
- e 血清M蛋白陽性

別冊
No. 23 写真

35 60歳の女性。3日前に鏡を見て偶然に頸部リンパ節の腫大に気付いて来院した。他の自覚症状はない。胸部に異常を認めない。腹部は平坦で肝・脾を触知しない。両側頸部と左鼠径部とに径2cm大のリンパ節を数個触知する。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球420万、Hb 11.7 g/dl、Ht 36%、白血球4,300、血小板24万。血清生化学所見：総蛋白7.2 g/dl、アルブミン4.3 g/dl、AST 28単位(基準40以下)、ALT 25単位(基準35以下)、LDH 230単位(基準176~353)。CRP陰性。リンパ節生検H-E染色標本(別冊No. 24)を別に示す。

適切な対応はどれか。

- a 経過観察
- b リンパ節郭清術
- c 放射線治療
- d 多剤併用化学療法
- e 自家造血幹細胞移植

別冊
No. 24 写真

36 5歳の男児。腹痛と血便とを訴えて来院した。2、3日前から咳と鼻汁とがみられていた。今朝、腹痛、血便、両側下肢の発疹および顔面の浮腫が出現した。両側下肢の写真(別冊No. 25)を別に示す。

皮疹の原因はどれか。

- a ビタミンKの欠乏
- b 血小板数の減少
- c 血小板粘着能の低下
- d フィブリノゲンの低下
- e 血管壁の異常

別冊
No. 25 写真

37 53歳の女性。全身倦怠感と夜間多尿とを訴えて来院した。頻回に起こる頭痛のため鎮痛薬を8年間で服用している。食欲は良好である。血圧152/90 mmHg。下腿に浮腫はない。尿所見：蛋白1+、沈渣に白血球5~7/1視野、細菌培養は陰性。血清生化学所見：尿素窒素35 mg/dl、クレアチニン3.0 mg/dl。

低値が予測されるのはどれか。

- (1) ヘモグロビン濃度
- (2) 平均赤血球容積(MCV)
- (3) 血清総蛋白
- (4) 血清ナトリウム
- (5) 血清カルシウム

a (1), (2) b (1), (5) c (2), (3) d (3), (4) e (4), (5)

38 55歳の男性。尿量の減少と全身倦怠感とのため来院した。腰痛のため市販の非ステロイド性抗炎症薬を3日間大量に服用した。顔面と下腿とに軽い浮腫を認める。脈拍104/分、整。血圧180/100 mmHg。肺野に coarse crackles (水泡音)を聴取する。尿道カテーテルを留置し10 ml/時の尿量が得られた。尿所見：蛋白3+、糖1+、クレアチニン95 mg/dl、Na 50 mEq/l、K 11 mEq/l。血清生化学所見：総蛋白6.3 g/dl、尿素窒素40 mg/dl、クレアチニン4.2 mg/dl、Na 131 mEq/l、K 6.7 mEq/l、Cl 100 mEq/l。腹部エックス線単純写真で腎陰影の長径は左右とも14 cmである。

最も考えられるのはどれか。

- a 腎前性急性腎不全
- b 腎性急性腎不全
- c 腎後性急性腎不全
- d 慢性腎不全
- e ネフローゼ症候群

39 48歳の女性。意識混濁のため救急車で搬入された。脈拍88/分、整。血圧104/62 mmHg。尿所見：pH 6.5、蛋白(±)、糖(-)、潜血(±)。血清生化学所見：尿素窒素14 mg/dl、クレアチニン0.8 mg/dl、Na 135 mEq/l、K 2.0 mEq/l、Cl 111 mEq/l。動脈血ガス分析(自発呼吸、room air)：pH 7.16、PaO₂ 80 Torr、PaCO₂ 32 Torr、HCO₃⁻ 12 mEq/l。

最も考えられるのはどれか。

- a Fanconi 症候群
- b アスピリン中毒
- c 乳酸アシドーシス
- d 原発性周期性四肢麻痺
- e 遠位尿細管性アシドーシス

40 70歳の男性。1か月前から血尿が続いているため受診した。腹部に腫瘤は触れず、外陰部に異常はない。直腸指診では前立腺は軽度肥大し弾性硬である。血液所見には異常なく、PSA(前立腺特異抗原)が3.4 ng/ml(基準4.0以下)であった。尿所見：肉眼的血尿があり、小さな凝血塊が数個認められる。尿蛋白1+、糖(-)、沈渣に白血球2~3/1視野、赤血球無数/1視野、異型細胞多数/1視野、細菌(-)。尿細胞診 Class V。膀胱鏡検査で膀胱頂部に母指頭大の広基性非乳頭状腫瘍が認められ、生検で腺癌であった。

この腺癌の発生母地はどれか。

- a 尿管
- b 尿管管
- c 膀胱粘膜
- d 前立腺
- e 尿道

41 36歳の3回経産婦。子宮がん検診で異常を指摘されて来院した。内診で子宮は正常大、付属器と子宮傍結合織とに異常はない。子宮頸部の擦過塗抹 Papanicolaou 染色標本(別冊No. 26A)と子宮頸部の生検組織 H-E 染色標本(別冊No. 26B)とを別に示す。

考えられるのはどれか。

- a 扁平上皮異形成
- b 扁平上皮癌
- c 腺癌
- d 腺扁平上皮癌
- e 未分化癌

別冊
No. 26 写真A、B

42 34歳の1回産婦。顔のほてりと無月経とを主訴に来院した。30歳ころから月経が不整となり、1年前から無月経となった。子宮は正常大で、両側付属器は触知しない。基礎体温は低温1相性で、エストロゲン・プロゲステロン試験で消退出血を認めた。

この患者で最も有用な検査はどれか。

- a 血中ゴナドトロピン測定
- b 子宮内膜組織診
- c 子宮卵管造影
- d 骨盤部単純MRI
- e 腹腔鏡

43 18歳の男子。サッカーの部活中に陰部を蹴られ、右精巣に腫脹と疼痛とが生じたため救急受診した。顔面はやや蒼白で、腰を曲げて下腹部を押さえている。右陰嚢部は手拳大に腫脹し、皮膚は青黒く緊満し、触診で強度の疼痛を訴える。血液所見：赤血球410万、Hb 13.5 g/dl、白血球8,100、血小板19万。尿所見と血清生化学所見とに異常はない。左右の陰嚢部超音波写真(別冊No. 27)を別に示す。

適切な治療はどれか。

- a 陰嚢温電法
- b 陰嚢穿刺
- c 陰嚢切開ドレナージ
- d 右精巣固定
- e 右精巣摘除

別冊
No. 27 写真

44 30歳の男性。頭痛とふらつきとを主訴に来院した。2年前から頭痛、易疲労感、物忘れ、口渇および見えにくさが自覚され、徐々に悪化してきた。身長158 cm、体重56 kg。脈拍64/分、整。血圧136/76 mmHg。両耳側半盲、うっ血乳頭および記銘力障害を認める。尿所見：比重1.001、蛋白(-)、糖(-)。尿中17-KS 0.5 mg/日(基準3~11)。尿中17-OHCS 1.5 mg/日(基準3~8)。

最も考えられるのはどれか。

- a 髄膜腫
- b 神経膠腫
- c 神経鞘腫
- d 頭蓋咽頭腫
- e 松果体部腫瘍

45 18歳の男子。両下腿部が細くなったことを主訴に来院した。12歳ころからつまずきやすかった。四肢遠位部に筋萎縮、前脛骨筋に高度の筋力低下、下腿三頭筋と手指筋とに軽度の筋力低下がある。足部に軽度の感覚障害を認める。正中神経の運動神経伝導速度は35 m/秒(基準50~60)。なお、父親にも同様の症状を認める。

適切な対応はどれか。

- (1) アキレス腱の持続的伸張
- (2) レクリエーション療法
- (3) 前脛骨筋の筋力強化
- (4) 作業療法
- (5) 短下肢装具の処方

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

46 50歳の女性。眼瞼下垂と嚥下障害とを主訴に来院した。2か月前から症状が出現し次第に増強した。現在では脱力も認められる。意識は清明。呼吸数12/分。脈拍84/分、整。血圧124/72 mmHg。心雑音とラ音とを聴取しない。心電図には異常を認めない。胸部造影CT(別冊No. 28)を別に示す。

診断確定のために必要なのはどれか。

- (1) 頭部CT
- (2) 脳波
- (3) 誘発筋電図
- (4) テンシロンテスト
- (5) メトピロンテスト

a (1)、(2) b (1)、(5) c (2)、(3) d (3)、(4) e (4)、(5)

別冊
No. 28 写真

47 72歳の男性。歩行時に増強する殿部痛と両側下肢痛とを主訴に来院した。3か月前から会陰部の異常感覚を自覚している。殿部痛と両側下肢痛とは立ち止まることで消退する。下肢の深部腱反射亢進や感覚障害は認めない。両側足背動脈の拍動は良好である。

最も考えられるのはどれか。

- a 脊索腫
- b 脊椎分離症
- c 強直性脊椎炎
- d 腰椎圧迫骨折
- e 腰部脊柱管狭窄症

48 7歳の男児。右前腕の激痛を訴え母親に連れられて受診した。8時間前、右上腕骨顆上骨折に対して徒手整復後ギプス固定を受けている。直ちにギプスを除去したが症状は改善しない。右橈骨動脈は弱く触知する。右手指を他動的に伸展すると疼痛は著しく増強する。

適切な処置はどれか。

- a 冷罨法
- b 筋膜切開
- c 麻薬の投与
- d 患肢の挙上
- e マッサージ

49 3歳の女児。今朝から立てないことを主訴に来院した。2週前水痘に罹患し、痂皮形成がみられる。昨日は歩行時にふらついていた。意識は清明。身長96 cm、体重14.2 kg。発音が不明瞭である。両方向性の水平眼振を認める。聴診で胸部に異常を認めない。腹部は平坦、軟で、肝・脾を触れない。項部硬直は認めない。指指試験、指鼻試験および踵膝試験は拙劣である。手指振戦を認める。膝蓋腱反射は正常で、Babinski徴候は陰性である。筋緊張はやや低下しているが、筋力低下はない。血液所見：赤血球452万、Hb 13.6 g/dl、Ht 38%、白血球6,200。CRP 0.2 mg/dl (基準0.3以下)。脳脊髄液所見：初圧120 mmH₂O、細胞数0/mm³、蛋白17 mg/dl (基準15~45)、糖58 mg/dl (基準50~75)。

無治療で観察したときの経過はどれか。

- a 急速に軽快する。
- b 徐々に軽快する。
- c 症状は持続する。
- d 徐々に悪化する。
- e 急速に悪化する。

50 42歳の男性。1か月前に突然出現した口渇、多飲および多尿を主訴に来院した。尿量は1日7.5lで、冷水を好んで飲み、夜間も排尿のために5、6回起きる。頭痛と視野障害とはない。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血清生化学所見：総蛋白7.6g/dl、アルブミン4.1g/dl、尿素窒素8mg/dl、クレアチニン0.8mg/dl、尿酸4.5mg/dl。血清浸透圧290mOsm/l(基準275~288)。

診断に有用な検査はどれか。

- (1) 水負荷試験
- (2) 迅速ACTH試験
- (3) 高張食塩水負荷試験
- (4) バソプレシン試験
- (5) 頭部MRI

- a (1)、(2)、(3)
- b (1)、(2)、(5)
- c (1)、(4)、(5)
- d (2)、(3)、(4)
- e (3)、(4)、(5)

51 49歳の男性。高カルシウム血症のため入院した。1か月前から食欲不振と全身倦怠感が強くなったため近医を受診し、血清Ca 16.7mg/dl、血清P 1.8mg/dlが判明した。入院後、血清生化学検査でPTH 1,500pg/ml(基準10~60)、超音波検査で甲状腺右下極に直径1.5cmの腫瘍が描出された。入院後2日目から意識障害が出現し、時間・場所・人に対する見当識が失われている。血清Caは17.5mg/dlに上昇していた。

まず行う治療として適切でないのはどれか。

- a 生理食塩液の大量輸液
- b カルシトニン投与
- c ビスホスフォネート投与
- d ループ利尿薬投与
- e 緊急手術による腫瘍摘出

52 53歳の男性。発汗過多、頭痛および体重減少のため来院した。数年来、発作性高血圧と起立性低血圧とのため近医で投薬を受けているが血圧の調節は不良である。糖尿病も2年前に指摘された。血圧は普段は正常であるが、発作時250/150mmHgに上昇する。尿中アドレナリンは正常で、尿中ノルアドレナリンとVMAとが高値である。腹部CTで両側の副腎には特記すべき異常所見を認めない。

次に施行すべき検査はどれか。

- a クロニジン試験
- b デキサメサゾン抑制試験
- c 腹部超音波検査
- d ¹³¹I-meta-iodobenzylguanidine(MIBG)シンチグラフィ
- e 両側副腎静脈血採取によるカテコラミン測定

53 52歳の男性。下肢筋肉痛を主訴に来院した。3年前の健康診断で高脂血症と診断され、食事療法と高脂血症治療薬(HMG-CoA還元酵素阻害薬)の服用とを開始した。3か月前に血清トリグリセライドの上昇がみられたため、フィブラート系薬の併用を開始した。1週間前から下肢筋肉痛が認められている。

病態の把握に最も有用な検査はどれか。

- a 血清電解質測定
- b 血清CK測定
- c 動脈血ガス分析
- d 尿中アルブミン測定
- e サーモグラフィ

54 52歳の女性。階段昇降時に息切れを自覚して来院した。5年前から寒冷時に手指の蒼白化を認め、次第に手指の腫脹と関節痛とが出現した。6か月前から息切れが続いている。顔面は浮腫状で、ソーセージ様指と指先に皮膚の陥凹とを認める。両前腕と下腿とに皮膚硬化を認める。両側下肺野に fine crackles (捻髪音) を聴取する。血液所見：赤沈 80 mm/1時間、赤血球 413 万、Hb 12.5 g/dl、白血球 6,200。血清生化学所見に異常はない。CRP 陰性、抗核抗体 1,280 倍(基準 40 以下)。

この患者で予想されるのはどれか。

- a 胸部エックス線写真で結節性陰影
- b 四肢エックス線単純写真で骨打ち抜き像
- c 上部消化管造影写真で食道拡張
- d 表皮基底膜に免疫グロブリン沈着
- e 抗 Jo-1 抗体陽性

55 2歳3か月の男児。発熱と発疹とを主訴に来院した。6日前から 38~39℃ の発熱が持続し、3日前から左頸部の腫脹と疼痛とを訴え、昨日、紅色皮疹に気付いた。全身に麻疹様発疹を認め、手足の背側が浮腫状で痛みがある。両側眼球結膜は充血し、口唇は潮紅して亀裂を認める。胸腹部に異常所見を認めない。断層心エコー法で冠動脈左前下行枝に内径 6 mm の動脈瘤を認める。血液所見：赤沈 80 mm/1時間、赤血球 340 万、Hb 10.2 g/dl、白血球 16,000 (桿状核好中球 20%、分葉核好中球 44%、好酸球 2%、単球 4%、リンパ球 30%)、血小板 56 万。CRP 15.5 mg/dl (基準 0.3 以下)。

第一選択薬はどれか。

- a 抗ヒスタミン薬
- b ガンマグロブリン
- c 血栓溶解薬
- d セフェム系抗菌薬
- e 副腎皮質ステロイド薬

56 34歳の女性。発熱、全身倦怠感および前頸部痛を主訴に来院した。3週前に発熱と咽頭痛とが出現し、1週間持続した。その後いったん軽快したかにみえたが、2週後に再び微熱が現れ、体重が 3 kg 減少した。身長 158 cm、体重 49 kg。体温 37.2℃。脈拍 96/分、整。血圧 138/66 mmHg。甲状腺は左葉が硬く結節性に腫大し、自発痛と圧痛とを認める。眼球突出はないが、手指振戦を認める。血液所見：赤沈 110 mm/1時間、白血球 4,100。血清 TSH 0.01 μ U/ml 未満(基準 0.2~4.0)、free T₄ 3.3 ng/dl (基準 0.8~2.2)。甲状腺¹²³I 摂取率(24時間値)3.4%(基準 10~40)。

病因として考えられているのはどれか。

- a 細菌感染
- b マイコプラズマ感染
- c ウイルス感染
- d 自己免疫
- e 悪性腫瘍

57 68歳の男性。脳梗塞で入院中に発熱と咳嗽とが出現した。膿性痰を認め、右上肺野に coarse crackles (水泡音) を聴取する。体温 38.9℃。呼吸数 20/分。脈拍 96/分、整。血液所見：白血球 13,600 (好中球 86%、単球 2%、リンパ球 12%)。喀痰の Gram 染色像(別冊 No. 29)を別に示す。

起因菌と推定されるのはどれか。

- a インフルエンザ菌
- b ブドウ球菌
- c 肺炎球菌
- d 肺炎桿菌
- e 緑膿菌

別冊
No. 29 写真

58 72歳の男性。2か月前からの咳、痰および微熱を主訴に来院した。ときに39℃台の発熱もある。体温37.8℃。脈拍92/分、整。聴診上特に異常は認めない。血液所見：赤血球380万、白血球6,240。胸水所見：胸水・血清蛋白濃度比0.6、アデノシンデアミナーゼ高値。セフェム系抗菌薬で症状は改善しなかった。胸部エックス線写真(別冊No. 30)を別に示す。

検査結果で考えにくいのはどれか。

- a 胸水は滲出性である。
- b 胸水の細胞分画はリンパ球優位である。
- c 喀痰塗抹 Grocott 染色陽性である。
- d 小川培地による喀痰培養でコロニー陽性である。
- e 気管支肺胞洗浄液の核酸増幅法(PCR法)は抗酸菌陽性である。

別冊
No. 30 写真

59 1歳2か月の女兒。母親が児の口腔粘膜の白色付着物に気づき、児を伴って来院した。白色付着物は次第に数を増し広がっている。舌圧子で擦過しても剝離困難で無理に剝がすと出血する。体温36.6℃。食欲は正常である。口腔粘膜写真(別冊No. 31)を別に示す。

この疾患の病原体はどれか。

- a *Candida albicans*
- b *Moraxella catarrhalis*
- c *Staphylococcus epidermidis*
- d *Streptococcus sanguis*
- e Herpes simplex virus

別冊
No. 31 写真

60 56歳の男性。定職なく公園で生活していたが、歩きにくいことを主訴に来院した。30歳ころからの大酒家である。2週前から食欲なく、全身の栄養状態は不良である。身長165 cm、体重39 kg。見当識障害、眼球運動制限、水平眼振および歩行時の体幹失調を認める。尿所見：蛋白(-)、糖(-)。血液所見：赤血球320万、Hb 9.8 g/dl、Ht 36%、白血球5,600、血小板8万。血清生化学所見：血糖90 mg/dl、総蛋白5.2 g/dl、尿素窒素24 mg/dl、アンモニア40 μg/dl(基準18~48)、AST 80 単位(基準40以下)、ALT 30 単位(基準35以下)、γ-GTP 360 単位(基準8~50)、Na 125 mEq/l、K 3.6 mEq/l、Cl 85 mEq/l。来院時の頭部単純MRIプロトン密度強調横断画像(別冊No. 32：矢印は病変部)を別に示す。

最も考えられるのはどれか。

- a Creutzfeldt-Jakob 病
- b 単純ヘルペスウイルス脳炎
- c Wernicke 脳症
- d 視床梗塞
- e 神経膠腫

別冊
No. 32 写真

◎ 下記の欄に受験番号および氏名を記入すること。

受験番号	氏名(楷書で書くこと)